



## 「仲間とつながる」市教組教研 たくさんの参加者で大いに盛り上がる

9月2日、南百済小学校にて市教組教育研究集会を開催しました。今年度は「障がい児教育」「国際連帯の教育」「外国語」の3分科会で報告をしていただきました。どの報告も充実した内容で、参加者は学びを深めることができました。どの分科会も1本ずつの報告だったので時間設定が気になっていましたが、報告のあとに質問や意見が多く出され時間が足りない分科会もありました。今年度の総括をもとに来年度の開催につなげていきたいと思えます。教研の成功に向けてご協力いただいた南百済小分会や報告者の皆さんありがとうございました。

### —教科別「外国語」分科会— 「小中連携による外国語教育」

中野中分会の児玉さんより、「外国語教育を通して小中連携をどのように進めていくのか」という話がありました。問題点としては、現在の中学の教科書は、小学校である程度学習しているという前提にあるので、中学で混乱する生徒がいること。逆によいことは、ペアワークや英語で表現してみようという意欲がでてきているということ。なにより小中どのように進めていくのかについて連携をとっていくことが大切、人と人がつながる連携は、組合だからできるのではないかという話もしていただきました。今後も「外国語のあり方や人をつなげる連携の場づくりを考えていくことを大切にしていきたい。」とまとめられました。



#### (参加者感想)

- ・私は中学校の様子しか知らないのですが、英語が教科化されて小学校の子どもたちはしんどくなっていないのか、先生方はますます労働強化になっていないのかをお聞きしたかった。学習指導要領に振り回されるのではなく、現実の子どもたちの様子、教育現場の状況から声をあげていかなければならないと思う。
- ・外国語活動により、英語を話そうとすることやペアワークなどでは、昔よりも格段に恥ずかしさや抵抗感がなくなっていると思います。しかし、「読む」「書く」では小学生に「覚えること」を求めており、週2コマ程度の時数では家庭での学習環境に左右されることが大きく、中学入学までにかなりの学力差がついてしまうことが心配です。

### —国際連帯の教育分科会— 「ウクライナからの渡日児童にかかわって」

梅香小分会の神吉さんより「ウクライナからの転入生と関わって」と題して、前年度に勤務していた西島小学校での取り組みの報告がありました。5名の転入生を受け入れ、教職員が力を合わせて向き合っていく様子がひしひしと感じられました。行政から受け入れの連絡があるものの、対応についての指示や協力はなく、学校任せになっている状況だったことについては、参加者から驚きの声が上がっていました。戦禍を逃れてきた子どもがいる中で、どのように平和教育を実践していくのが良いのか、現場での葛藤が伝わる報告でした。



#### (参加者感想)

- ・「平和教育の新たな持ち方を考えていく」が、大きな課題だとわかりました。日本は戦争に参加していないが、防衛費についてや、ウクライナとロシアで起こっている戦争についてなどを、どう取り上げて行くべきか。いろいろ考える機会になりました。

(裏面に続く)

- ・私の勤務校でも、ウクライナからの難民として転入してきた生徒がいます。今は関係性づくりのため、世間話をしたり（主に英語で）、カタカナの勉強をしたりして過ごしています。そのため、その生徒に踏み込んで今の気持ちを聞いたり、祖国ウクライナへの思いを聞いたりできていないのが現状です。でも、子どもの気持ちに寄り添うため、教員や行政が家庭とつながっていくことが必要だとあらためて感じました。ありがとうございました。
- ・実際に戦禍を体験している児童生徒がいる中で、ピース大阪の見学やヒロシマへの修学旅行、大阪大空襲などの平和学習の取り組みを、どう組み立て、どのような配慮が必要かということについて考えさせられました。「祖国のために」ということについても、その意味合いは一律ではないので、どう捉えるか、どう声をかけるかは難しい課題です。自分がその立場に立ったとしたら、戦争の本質と構造について学習するとともに、その言葉を発する子どもの思いや考えに向き合っていく中で考えていくしかないと思いました。
- ・ウクライナの子どもたちへの取り組みとして、最前線をいっているものだと思います。本校にも一名、ウクライナからの児童がいましたが、午前中は日本語教室、午後は私立の日本語学校のダブルスクール状態で、子どもたちと関わるのが難しい状態でした。

## 一障がい児教育分科会— 「自校通級指導が始まって」パネルディスカッション

パネリストに、田辺さん（喜連西小）、中塚さん（田辺小）、植松さん（清水小）、松本さん（南津守小）を迎えて、自校・他校通級をテーマにパネルディスカッションを行いました。



通級指導実施の前年度の準備期間や今年度当初について、パネリストから各校の状況を聞き、質疑応答も交えながら分科会が進みました。通級学級・支援学級それぞれの対象児童生徒の申請、個別の自立活動内容、他校通級児童生徒の受け入れ、人材確保などにおける様々な課題を共有することができました。

（参加者感想）

- ・4校の各々の具体的な状況を伺うことができよかった。本校では来年から通級学級が設置されますが、未だに分からないことばかりです。文科省の指導により、大阪の原学級保障がなくなってしまうのか、どうなるのかと思っていました。子どもの実態は変わらないのに、入れ物を変えて、また、在籍をはずして、学級担任の負担は増えないのでしょうか。学級担任と通級担任がどのように連携しているのかについても教えていただきたいのですが、時間がありませんでした。ともに頑張っている仲間がいることに力をいただきました。ありがとうございました。
- ・自校通級が始まっている学校（他校プラス自校の学校も含めて）の話を知ることができたのは貴重な機会となりました。4つの学校の話を知るディスカッション形式でしたが、4つの学校だけでも実際の通級の形が違うことに驚きました。来年から私の学校で通級が開設されるので、どのようにすればよいかの一助となったと思います。あまりに新しい取り組みが、突然おりてきているので、教育委員会やインクルーシブから一定の形や取り組み方が伝えられたらいいのにとおもいますが、各学校での特別支援の形も違うので、あまり制限があってもしんどいかなとも思いました。
- ・実際に通級指導をされている学校の具体的な話が聞けて良かったです。このままいくと大阪の原学級保障の継続が難しいのではないかと危惧しています。私の学校では特別支援学級は複数ありますが、実際には2名しか抽出指導していないので、書類の書き方によっては特別支援学級の数を減らされそうだなと思いました。田辺さんがおっしゃったように、低学年のうちに支援をたくさんして、通級をしなくてもいいようにするということが大切ではないかとも思っています。
- ・通級指導によるメリットがよく見えないなあと思いました。私の受持ちの子の保護者の方も心配されていたので、お話を聞かせていただいて良かったです。
- ・やはり、どの学校でも「特別支援学級から通級に移ってくれ」と言われているんだと分かった。今年度は管理職とも利害が同じ（特別支援学級を増やしたい）だったので、校長がヒアリングでがんばれたが、来年度に向けては厳しいなあと思っています。原学級保障など、支援の仕方は学校によるのだと思いました。
- ・昨年度まで2年間ほど、狭山市の中学校へ研究のため週1回行っていましたが、そこには通級学級があり、少し関わらせてもらってました。狭山市では全小中学校に、すでに通級学級が設置されており、原学級、支援学級、校内フリースクール、通級など生徒はその特性に応じて、いろんな居場所が学校内にあるのだなと思っていました。学校内で多様な児童生徒を包摂するためには、やはり多くの教職員を配置しないとイケないと思います。支援学級から子どもを追い出して、学級数を減らすというねらいではなく、多様な子に支援ができるための体制として通級が運用されることを願います。
- ・通級指導教室での指導についてほとんど知らなかったもので、少しでも内容がわかり、よかった。ともに学び、ともに育つ…これからも考えていきたいです。